

特集Ⅱ 『多文化共生をどう捉えるか』の刊行

多文化共生をどう捉えるか

—編者による座談会（2018年12月7日）—

田 卷 松 雄・出 羽 尚・立 花 有 希

（文章起こし：国際学科2年 新井南歩）

『38講』から『多文化共生へ』

田卷：本書『多文化共生をどう捉えるか』（下野新聞新書）は、国際学部が出した2冊目の新書となります。ほぼ予定通り出版することができました。編集に関わった3人でいろいろと振り返りたいと思います。よろしくお願ひします。

それではまず、最初の新書『世界を見るための38講』の編集にも関わった者として、この間の流れを振り返っておきます。『38講』の時は学部設立20周年記念事業の一環として出版を考えました。それぞれの教員がこれまで大事にしてきた教育とか研究の内容をエッセイとして書いてもらうとともに、学部が組織的に取り組んできた特色あるプロジェクトやプログラムをコラムという形でまとめて、広く国際学部のこれまでの研究、教育を振り返るとともに、20周年を迎えてこれから新しい姿を追求していく想いを込めて作ったものでした。今回は、2年前に従来の国際社会学科と国際文化学科を国際学科に1学科統合した改組で、新たな学部の教育目標を多文化共生に関する体系的・専門的な学びと位置付けたことを踏まえ、すべての教員がそれぞれの専門分野に引き付けて多文化共生を語る内容にしたわけです。新しい国際学部の姿を広く読んでもらえるような形にして発信したいという想いでこの本の企画を考えました。佐々木一隆学部長もこの提案にすぐに賛同してくれまして、今年の秋のオープン

キャンパス（2018年10月27日）に間に合うように出したいということで、学部長と相談して出羽さんと立花さんに編集に加わってもらえないかということで声をかけまして、ご快諾いただいたという形です。

そんな経緯がありまして、多文化共生を語るというテーマはすでに中心に据えられていたことなんですけど、どういうふうに本書を構成するかとか、どんな工夫をするとか、いろんな点で編者の間で意見交換しながら作りたいなというふうに思って始めました。まずこの本の編集をお願いしたいと声がかかったときのお気持ちとか意欲とか、なんかそこら辺をちょっと振り返ってもらえたらいいかなと思います。どうでしょうか。

出羽：最初話があったのは、12月くらいでしたかね？刊行まで1年はなかったような気がするのですが。

田卷：ああ、そうですね。

出羽：立花先生もそうかと思いますが、私自身は『38講』には関わっていませんでしたし、当然、その時に原稿も書いていませんでしたから、まず、こういう形で国際学部全体で出版する企画に参加することになった時に、個人的には、何かこう初めて学部の一員に入れたという、純粹にうれしいという感覚がありました。言い方は変ですが、なんとなくまだ学部に入っているのかいないのか、といった感覚が私の中には多少あったので、そこから一步踏み出すような、そのような気持ちはありました。さらに、そうした機会にこのよ

うに編集自体にも関わることになったので、学部と自分のやっている教育や研究とをあらためて自分の中で位置づける作業として取り組めたら良いかなという気持ちで参加しました。また、自分のことだけでなく、他の先生方がどのようなことをされているかを知るきっかけにもなるかと思いました。

田巻：立花さんはどうですか？

立花：以前、「この人にとっても頼んだ仕事を断られるとショックなんだ」と田巻先生に打ち明けられたことがありまして、頼まれた仕事は断らないようにしているので、佐々木学部長に声をかけていただいたからお引き受けしたというのが始まりなのですが、田巻先生と出羽先生と一緒だと聞いて、面白そうなメンバーだなと。実際、ただただ楽しく過ごした感じです。

そして何よりテーマがよかったです。多文化共生という名の付く科目ばかり担当しているので、多文化共生を含む内容でという依頼に対して国際学部の先生方がどういう文章を書かれるんだろうとワクワクしていました。自分のリクエストで論考を書いてもらっているような。その原稿を最初に読める立場をいただいて、とてもうれしかったです。

田巻：お二人とも『38講』には書いていませんね。

立花：はい、書いていないです。

全員が多文化共生について語る

田巻：そういう意味では、前回とは別な新しい目を意識したことはあります。前回の『38講』の編集に関わった方（田口卓臣、松尾昌樹、松村史紀）は彼らなりの想いとか視点を踏まえ『38講』と一緒に関わってくれたんですけど、また違う面々と一緒に新しいもの作れるということは僕にとっては楽しみ

でした。最初から比較的良好い感じでスタートできたかなと思います。先生方に原稿の執筆を依頼した時は、学部が1学科になって多文化共生を学部の教育目標に据えたことを踏まえ、すべての教員が多文化共生について語る本を作ることにしたので、この点についての理解をお願いするとともに、本文の中に多文化共生という言葉を必ず1回は使うことを条件とすると伝えました。そして、後は自由に書いていいよというような依頼の仕方をしたんですけど、よく言われるように国際学部の教員は本当に専門分野が多様なので、例えば文学の教員がどんなふうが多文化共生を語るのか、アフリカとか中東を研究している教員が、あるいは南米を専門にしている教員がどのように多文化共生を語るのか、というようにどんな原稿が出てくるのか、そういう楽しみを最初から感じていました。それぞれの専門はベースになるでしょうが、専門にしてきた内容を書くのではなく、多文化共生について論じるわけで、恐らく学部の全教員が多文化共生について語る本書のような本は、まだ例がなく、とてもユニークな本が作れるのかなという期待もあったわけです。

出羽：確かにそうです。正直、私自身は多文化共生という概念については、専門的に研究しているわけではもちろんないし、授業でそのことに触れることもあまりありません。そういう意味では、私のように普段は立ち入らないような人たちが多文化共生を考えることで、限定的な、あるいは閉じた専門家たちだけが多文化共生を考えるのではなく、多様な人が考えて議論をすることこそ、この問題を考えるうえでは非常に重要なことなのだというのを、この本では一つの形として提示できたのではないのでしょうか。普段はこの問題について語らない人たちが語ることで、様々な人が多文化共生を考えるきっかけを与える

ことができるでしょうし、多様な視点を持った人たちがそれぞれのレベルからこの問題を考えることに繋がる。そういう意味で、多文化共生という概念、あるいは主題は、誰にとっても身近な問題だということを、本として示せたのかなという気はしますね。

田巻：少し遡って、ミッション再定義という、今もう忘れ去られているかもしれませんが、すべての国立大学の学部が何を社会的使命にしているのかという再定義を文科省から求められたときに、やっぱり国際学部の1つのキーワードは多文化共生だったんですね。ただ、当時学部長としてこの作業に関わっていましたが、学部の教員の中でどのくらいの人が多文化共生という課題に高い関心を示しているのか、よく分からない状況があったというのが正直なところです。関連して、多文化公共圏センターの仕事にどれだけの教員がコミットしてくれるのかという点でも、ちょっとお寒い状況がまだあったわけです。多文化共生や多文化公共圏というのは特定の教員がやればいんだという雰囲気は少しあったかなと思います。ところが、学部を改組してこういう作業を積み重ねていく中ですべての教員が多文化共生を考えなければいけないという雰囲気が確実に出来てきたかなと感じていまして、そういう意味でもこの本の出版の意味というのは大きかったかなと思います。

立花：やっぱり先生方はみなさんさすがというか、プロだなと思うのが、お題が与えられると、きちんとそれに答えてくださるんですね。だから、FDとかそういう話し合いのような形で意見を出そうとしてもなかなか出ないけれど、必ず原稿を出すということになると、お一人ずつから確実に答えがいただけるというか。それで、本当に一気に形になったなっていうのを感じました。それまで、どん

なに積み重ねようと思ってもなかなか進まなかったものが。

田巻：逆に言うと、こういう機会をなかなか作れなかったので関わりたくとも関われなかった人がいたということがあるかもしれないですね。ほんとは語りたいけど、「多文化共生は専門外だから」みたいに自分で思ってしまう人もいたかもしれないですね。結局、原稿の提出が大幅に遅れた人も何人かいますが、全体的には比較的スムーズに進めることが出来たのも、言葉では忙しいだとか大変だとか言いつつも、この仕事を優先的に考えてくれた結果かなという気はします。

出羽：制作の時期もよかったのではないのでしょうか。原稿を書く時期が、おそらく2月から4月とかそれくらいだったと思うので、授業がなくスケジュール調整しやすい時期であったかもしれないですね。私も自身の原稿は学生の英語研修で滞在していた東マレーシアで書きました。それこそマレーシアは多民族国家で、私たちの滞在したサラワク大学の中でも外に出ても、多文化共生という問題を考えるヒントにいくつも出会いました。その時期はちょうど中国の旧正月の時期で、街中が紅い提灯で飾られ爆竹が鳴いていました。サラワク大学に中国系の講師の先生がいらして、その先生のすごく立派なお宅に学生たちと招かれて、正月のごちそうを頂く機会がありました。これは、オープンハウスと呼ばれる宴で、文字通り誰でも参加でき、訪問客が絶えずやってきて、各家庭をはしごする人も多いそうです。マレーシアでは、イスラム暦やヒन्दウー暦の祝祭日にもこうした交流の祝宴が催されるそうです。例えばそのような経験をしながら、この本のことを考えたりしていたので、直接的に原稿には触れていませんが、少なくとも、そのような環境にいて考えたことが、たまたまですが

できたことは貴重な経験でした。

学際的・国際的に考える

田巻：予定通りほぼ原稿が集まってきて、今度はこれをどう並べて1つの本にするかを考えるわけですが、やっぱり分野が多様なのでなかなか上手く括れないという問題があります。だから38講は一とか二とか三とかっていう分類はしたんだけど、質的な意味でのカテゴリー化とかはあんまりしてないんですよ。でも、今回はなんかそれもチャレンジしてみたいなというようなことを考えていた時に、お2人から「学際的に考える」と「国際的に考える」という2つの大きな柱を立てたらいいんじゃないかという提案を出していただいた。これはすごいヒットだなと、正直思いました。そこら辺はどうですか、どういうふうに思いついたというのか。

立花：以前の国際学部のパンフレットで、当時、学部長だった田巻先生の挨拶のところに“国際学部は国際・学際”と端的に言い表されていて。高校の出前授業に行くと、少し学部の紹介とかするじゃないですか。その時にいつもそこから話に入るので、国際学部といえば「国際・学際」というのが私の中ではキャッチフレーズなんです。それで、そこをベースに大きな枠組みを作れば読みやすいかなと。

田巻：確かに、学部長の時の挨拶に「国際学部の特色は学際と国際の2つの際」ということを書いていますけど、この本の編集の時には、それがあんまり浮かんでいませんでした。どういうふうに並べたらいいかなと、正直僕にとって難しい課題だと感じていた時に、それをうまく思い出させてくれて、並べていくと結構こういい感じの並びになりましたね。

立花：そう考えながら改めて目次を見ると、いい構成ですね（笑）。

出羽：そうですね。さらに、国際、学際の“際（きわ）”だけではなく、それぞれの教員間の“際”のつかず離れずのような揺れる感じもあって、教員間の研究や教育の関係も“際”で接しているところがあるのかも知れないですね。それがあから、このように学際的、国際的としたときに上手いこと全ての原稿が収まったのかなと思います。本質的にはそうした“際”で私たち教員はつながっていたのだと思うのですが、もしかしたらそのことにあまり気が付いていなかったのかも知れません。どうしても、既存の学問のカテゴリーで考えると、私はこれで、あなたはこれで、といった認識になりがちです。そうすると互いがどうしても違うものに見えるわけですが、それが実は全然別のもではなくて、気づきもしなかった所でつながっていて、それがこのような本の形にしてみると、良く分かる。だから、それぞれの先生が自分の両隣にいる先生と実は近いのだという、気づきが得られるのではないのでしょうか。大きな節の分かれ目はありますが、例えば、重田先生と田口先生が隣り合って流れていくのは、私にはすごく新鮮です。

田巻：隣り合ってますか。

出羽：その後続く米山先生と戚先生の間“際”などやっぱり面白いなと。さらにそこから大野先生に繋がるとか。

3人がそれぞれコメントを返す

田巻：それで、この本の作り方という点ですが、最初の原稿に対して3人でコメントを作ったんですって？それとも別々にコメントを返したのですって？

立花：別々にコメントを出したのを田巻先生が

まとめて。

出羽：単純にくっつけてまとめました。

田巻：コメントを作ることは時間的にもなかなか大変なことではありますが、そのやり方もよかったというか、自由に3人からコメントを出して、それをいったん受け止めてもらって加筆・修正してもらおうというやり方でしたよね。

出羽：よかったのではないのでしょうか。分担するよりは、全体を全員が読んでコメントするのがよかったのかなと思います。

立花：結果的に、3人で一つの意見として集約はせずに先生方にお返ししてたんですけど、もしまとめていたとしたら編集側の意見の方が強くなってしまって、絶対修正をしないといけないというような力関係になっていたのかなと思います。今考えると結果オーライだったような。一意見としてという感じで3人それぞれがコメントを出すことで、「あ、そういう見方もあるのか」くらいの受け止められ方をしたのではないかと。すべてに伝えてくださる先生もいらっしやっただし、「そこは譲れない」というような著者の最初の想いがある場合にはそれを尊重することもできたし。

田巻：確かに、編者としてまとめたコメントを返すと、少し威圧的というか、逃れられないというか。

立花：強い感じがしますよね。

田巻：一応コメントは僕が集約したわけですが、誰のコメントか分からない形にしました。

立花：匿名というか、誰がどのコメントを言っているかわからないような状態にしていただいて。

田巻：コメントを集約する作業は結構面白かったです。同じものを読んでも全然違うコメントになるわけじゃないですか。だから、こ

ういう読み方もあるし、こういうコメントもあるのかなというのを感じながらの作業でした。

立花：それは私もとても面白かったです。

出羽：ところで、思ったのですが、あの編者のコメント自体をこの本に対するひとつの問題提起として、多文化共生を考える際の資料のようなものとして活用できないでしょうかね。コメント自体を年報に載せたり、だめでしょうか？

田巻：コメントをですか？

出羽：コメントを。

田巻：面白い論点ですね!!

出羽：そのままでなくとも、コメントの中で重要な点とか見返したらないでしょうか。

立花：そうですね。最初に読んだときの新鮮な感想というか第一印象はそれですもんね。

田巻：それで結局、「学際的に考える」と「国際的に考える」の二部構成にしたわけですが、日本から出ていき日本に戻ってくる構成に原稿を並べましたね。最初の原稿のNは日本ですね。

出羽：本全体を通じて、日本で始まって日本で終わるとしたのでしたね。

田巻：多文化共生をテーマとした場合、いろんな課題がやっぱり正直言ってあるので、批判的な視点で現状を分析していろんな課題を提起するという、そういうスタイルの論文も多くなると思うんですけど、最後はちょっと光みみたいな話があったほうが良いかなという意見で3人が一致しました。自分が最後のエッセイを担当しましたが、多文化共生を担う次世代の若者への期待を述べて閉じたわけです。

それで、「おわりに」も、自分が書いたんですけど、去年、多文化共生概論という必修科目を初めて開講したところ、多くの学生の反応は多文化共生という共通のテーマにつ

いていろんな先生方の違った話が聞けたこと
がおもしろかったという感想だったんです
ね。だから、おそらく多文化共生というのは
ほんとにいろんな語り方ができるし、いろん
な点から入ってくるができるっていう
ことを一年目の授業で実感として感じたん
です。それで昨年は、年報の特集に多文化共
生概論の振り返りみたいなものを入れました。
今回「おわりに」を書くときに、今年のも
多文化共生概論の一回目のコメントシートに
書いてもらったものを見たら、本当に英語だ
けでも海外だけでもない、あるいはそれと関
係付けながらもいろんな観点から多文化共生
を考えることができる学部に入って本当に嬉
しいということが随分書かれていたので、そ
れを何人か最後に引用する形で締めくくった
んです。その時、出羽さんからなかなか素晴
らしい終わり方だと言っていたので、それ
は正直嬉しかったですね。それなりに良い終
わり方ができたかなみたいな感じです。

出羽：大学に入学してくる新入生は、問題意識
として割とクリアにこの多文化共生について
考えようと思って入学してくる人が多いとい
うことですよ。

文化と社会が絡み合った二部構成

田巻：2学科に分かれていた時、結構迷う学生
がいるんですよ。どっちも学べるような学
科があればいいなと意見は結構あって、そ
ういう意味では全員がどうかはわかりませ
んが、1学科体制にして、学ぶ目標はクリア
にはなりましたよね。多文化共生というい
ろんなアプローチができるような、極めて
現代的なテーマを自由に学べる学部として
入りやすくなったし、いろいろな旅もしや
すくなったとか。やっぱり社会と文化
は結構な拘束力があって、垣根は低いとは

いってもどうしても社会系・文科系の区切
りとか違いが意識される。なので、1学
科にしてかなりいい意味で緩やかになっ
たかなと思います。

出羽：そうですね。今回の本を大きく2部に分
けたのも、旧来の文化と社会に分けていま
せん。文化と社会がそれぞれに絡み合っ
て出来上がっています。国際学部の学生が、
例えば、特定の分野や地域に興味がある時
に何を考えたらいいか、既存の文化や社
会という枠ではない、多様な視点がある
ということだと思いますよね。興味のある分
野や地域にであったとき、そこからどのよ
うなことをしようかと考えたとき、多様な
アプローチがあるのだということ、目次
をパッと見ただけでも分かるというか、気
づくきっかけや指針が伝わるものになっ
ていますね。既存の文化とか社会とは違う、
まさに改組したことの学部としてプレゼン
としての本ではないでしょうか。組織の在
り方を示しているような。

田巻：それで、トータルで言えば数か月この
編集に関わったわけですけど、今から振り
返って印象的なのとか、大変だったこと
でもいいしハプニング的のこともいいん
ですけど、どうですか。

立花：まったく個人的なことなのですが、あの
編集期間に書くことに関して極度のスランプ
に陥ってしまいました…。先生方がとっても
いい文章を出してこられるので、自分の文章
表現の拙さに向き合わされたとか。そう
いう意味では実はすごくつらい時期だったん
ですけど、そこから一皮むけたとか脱す
ることができたのもやはりここで原稿を出さ
なくてはならなかったからで、それも含めて
ありがたい経験になりました。

それと、よく学生さんたちに本を読むときは
その著者に会えるならどんな質問をするか

考えてみるといいよとすすめるのですが、この本については、国際学部の学生なら本当に著者がそこらにいるわけじゃないですか。それは学生さんにとって幸せなことだなあとはいましたし、私自身もその機会に恵まれている一人なんだと感じて、とてもうれしかったですね。

田巻：学部が今定員90、もともと100だったけど90になって、教員の数もちょっとずつ減ってきて、今33ですよ。結果論かもしれないけど、一つの本を作るには適正な人数だったかなと。これが60とかまた10だったらいろいろ難しいなっていうところですよ。あとはエッセイという形の性格を踏まえた編集をこちらとしては考えたんだけど、全員の希望にこたえられなかった面はありますが、それはそれで・・・。

立花：そうした方針をつくる時も、読者として想定される圧倒的多数の人にとって何が一番ふさわしいのかというところに判断基準があったので、そういう意味では編集のブレはなかったかというか。高校生とか大学生とか一般の方々の手に届いた時にどういう体裁が読みやすいかっていうのをいつも考えていたような気がします。

いくつか書評をお願いする

田巻：そうですね。原稿の依頼の時にも、一般の人という言い方がいいのかわからないですけど、誰にでもわかりやすく読めるような内容にしてほしいとお願いしました。それで今度はこの座談会の記録もそうなんですけど、いろんな方に書評を書いてもらうということで、今お願いしているところです。1つの本にいろんな人から書評を寄せてもらって特集で組むというのはなかなかないと思うんですね。どんな書評が届くのかすごく楽しみ

です。

出羽：いくつかの書評が集まったところで、また、その先につながる議論が出てくるような気がしますね。議論がどんどん展開していくといいのかなと思いますし、多分そのようになるのではないかと思います。

立花：例えば多文化共生概論の授業のときに、この本とその書評も合わせて紹介すると、その授業で出てきたものがまたそこに加わってさらに発展していくというか、広がっていくのではないのでしょうか。

田巻：それで今、多文化共生概論という話も出しましたが、来年入ってくる学生の新入生セミナーと多文化共生概論では、『38講』ではなく、多分この本をテキストとして使うことになると思います。

出羽：こちらだけになるのですか。

田巻：まだはっきりは決めていないですが、そのときに今話に出ているような、書評も一緒に取り上げるとすごく面白いですよ。学生も書評を読むことはあんまりないかなって気もしますから。いろんな材料が揃っていますね。だから特に新しく入ってくる学生には、学部がどういう学部で何を大事にしているのかいうのを十分知ってもらったうえで、最終的な研究課題を選んでもらいたいと思います。入り口のところでこの本をしっかり読んでもらうことがすごく大事なことだと思います。

出羽：そうですね。この本の重要な展開は、例えば書評を参考にすることで、学生たちが自分はどこまでいけるのかということを考えることではないでしょうか。書評を使えば、そのような展開も十分期待できると思います。

田巻：あとは、国際学部に関心をもって選択肢の一つとしてくれているような高校生にもぜひ本書を読んでもらいたい。やっぱり、僕らとしても学部のことをしっかり調べて高い関

心もってくれる学生に入ってもらいたいという思いは強いです。そういう意味では良い参考資料ができたと思います。秋の10月末のオープンキャンパスの前にぜひ本書を刊行して、オープンキャンパスのときに宣伝したかったわけです。お陰様で、50冊くらいかな、生協で置いてもらったものは全部完売したということです！！

立花：はいはい。もっと置いておけばよかったっていう（笑）。

国際と多文化共生

田巻：多文化共生について考えたいというような、そういう表情をしている学生さんが結構オープンキャンパスにいたような感じがしますね。

出羽：高校生が多文化共生に関心を持つきっかけはあるのでしょうか。どうですか。

田巻：突然ですが、学生さん（新井南歩さん）も発言をお願いします。

新井：多文化共生に対する関心ですか？ 今、いろんな多文化共生があるじゃないですか。私の場合は学校に、そういう田巻先生がやってらっしゃる、外国人の、外国語学科がある学校だったので結構留学生が行ったり来たりっていうのが多かったりとか、外国にルーツを持つ子が多かったので、そこでいろいろあって多文化共生っていうことには惹かれ始めました。

出羽：多文化共生という言葉は使っているのですか、高校で。例えば、多文化共生に関わる問題を自分で考えたり、面白そうだなと思ったりするときに、すでに多文化共生という言葉は高校生の中にあるのですか。

新井：ありました。私の場合は。授業ではあまり使わないですけど、人権関係の講演に行ったらっしゃる方とかからそういう話が出てくる

ことが多くて、それをきっかけに授業中も先生方の中で流行るじゃないですけど、そういうのを切り口にする授業もあったりしました。

出羽：そうすると、高校の授業で多文化共生という言葉を知るきっかけはあるし、それ以外にも関心をもつきっかけはあるのでしょうかね。であれば、関心を持つ高校生にとっては、この本のようにタイトルに「多文化共生」と書いてあると、「あっ」、と気づきやすいかも知れないですね。

でも、例えば、多文化共生学部とかっていう名称の学部はないですよ。その点では、多文化共生に興味を持った高校生が大学を選ぶ際には、当然、色々な選択肢があるし、それこそどの様な領域でも良いわけで、それを高校生が考えて決めるというのは少し難しいかも知れません。多文化共生をどの様に捉えるかを大学に入る前に決めるということですから。そのような高校生に対して、「はい」ってこの本を見れば、「あ、何かこういうこと考えられるかもしれない」というヒントになるのではないのでしょうか。もちろん、田巻先生がずっとやっていらした活動を通じて、この本を出す前から多文化共生に興味をもって国際学部に来た学生はいましたが。

田巻：あとやっぱり、国際という言葉の響きがまだまだ大きくて。なんとなく、国際的なテーマを意識しながら、その中でどういうテーマに絞っていかうかなと考えたときに一つの有力な方向性が多文化共生かなと思います。どちらかというともまだ国際のほうがベースになっているというか、広いというか。そこに具体的な目標が見えてきたみたいな、そういうイメージでしょうか。

出羽：国際という枠の中の一つの考え方ということでしょうかね。

立花：多文化共生に興味を持っていたから国際学部を志望した、という順序は望ましいというか、ありがたいとは思いますが、国際学部に行きたいという動機が先で、そこが多文化共生っていうのをやっているらしい、じゃあ、多文化共生について勉強していこうという志願者も少なくないと思うんですよね。そのときに、その多文化共生というのが総務省の文章に出てくるようなあの表現で止まってしまっていると、いい小論文は書けないですし、面接でも豊かな発言を引き出せないで、受験生には多文化共生について自分の経験や内面から湧き上がってくるものを考えてほしい、自分の目を通して考えてほしいということを入試業務に携わるときにいつも思っていました。そういう意味で、この本は、国際学部を志望してくれるみなさんに私たちが考えている多文化共生について発信するものでもあると思います。

タイトルについては、私たちは『多文化共生とは何か』というのを提案したんですよね。

出羽：そうでした。

「何か」ではなく「どう捉えるか」

立花：田巻先生の資料室で打ち合わせをしていたときに『〇〇とは何か』という書名の本が目について、タイトル案として出羽、立花は『多文化共生とは何か』を出しました。でも、～とは何かという表現にしてしまうと、その“何か”がすでにあってそれを勉強してくださいっていうメッセージになってしまうかもしれない。『多文化共生をどう捉えるか』なら、まだ確定はされていないけれど、こういう見方もあるんじゃないか、こう考えてもいいんじゃないか、あなたはどこう思う？っていうようなニュアンスが伝わる

なあと思って。とっても良いタイトルだったと思います。だから、国際学部志望の高校生にはぜひタイトル通りの読み方をしてほしいなと願っています。

田巻：たしかに、総務省の2006年の定義は、インパクトという意味では非常に大きいんだけど、あれが多文化共生だと話になると、それ以上の展開がないんですよね。だからやっぱり作っていく概念だし、こういう捉え方もあるんだというのを積極的に提起していくためのツールというか概念というか。そういう意味では、多文化共生は内容豊富な概念である可能性を多に秘めている言葉かなと思います。不思議な言葉ですね。

立花：そうすると、結構、四六時中このことを考えていないと自分ではそれにはたどり着けないと思うんですよね。多文化共生って書かれてある本を読んでいるだけでは多文化共生は見えてこなくて、さきほど出羽先生がお話された、マレーシアで過ごしていた時間の中で湧いてくるものがあるとか。それはやはり多文化共生のことを考えながらマレーシアで過ごしていたから何か結びつくようなことを感じとられたのだと思うんですけど。だから、学生にも専門書とかそういう文章ばかり読むのではなくて、一見全く関係なさそうなものの中から何かこうヒントがあるんじゃないかって考えるようにもしたほうがいいとよく言うのですが、この本には33本のお手本があるというか。映画からみればこうだとか、文学からみればこうだとかっていうのを、なるほどそういう多文化共生という言葉が使われてないところでも多文化共生を考える種はあるのだと実感してもらえないでしょうか。その素材の活用の仕方が先生方は卓越してらっしゃって、専門性の高い方がやるとこういうことになるんだなと私も一読者としてとても面白かったです。

出羽：もしかすると、多文化共生は限定的に議論されているだけで、未だ特定の問題だけを扱っている段階なのかも知れません。しかし、例えば、文学でもそうだし芸術でもそうだし、多文化共生は重要な主題となっています。またマレーシアの話題で恐縮ですが、もともとマレーシアとシンガポールは同じ国だったわけですが、その両国のアイデンティティを主題にした現代美術の映像作品があります〔ブー・ジュンフェン《ハッピー＆フリー》（2013年シンガポールビエンナーレ出品）〕。残念ながら、日本で考えられている多文化共生の議論は、こうした文化、芸術の領域には及んでいないように思います。しかし、その視線を少し拡大するということが必要ですよ。

立花：学際、国際って視点を移せますよね、違うところに。そっちから見るとそうなんだという発見があるのが醍醐味だと思うのですが、たとえば松尾先生の文章とか、ああ、なるほどって。いつもの自分のアプローチの裏なのか向かいなのか、ともかく新鮮な感覚を呼び起こす文章があって、いろいろと自分を振り返る機会にもなりましたし。

国際学部の教員は全部読む

田巻：立花さんも言いましたけど、教員間で何らかの共通テーマについて語り合うというような機会は実はあまりないですよ。でも本書が刊行されたことで、間接的とは言ってもそれが可能になりますよね。だから、改めて国際学部の教員がそれぞれの専門を踏まえて多文化共生をどのように語ったかということを知りながら、学部の可能性と面白さも感じられる内容になったのかなって感じがします。だから、良い形でいろんなところに広く発信していきたいなというふうに思っています。

出羽：まず、先生方が読まないといけませんね。全体を読んだ先生はどれくらいおられるでしょうか。

田巻：学部の教員がですか？

立花：今度テストしますか（笑）。

田巻：そうですね、それ、必要ですよ（笑）。

出羽：そうしないと教員も意識できないのではないのでしょうか。

田巻：今度提案します。これ全部読んでいるのは、今のところ我々だけでしょうから。学生はちょっとわかんないけど。

立花：他学部の先生方にもぜひ読んでいただきたいですよ。国際学部がやってるのはこういうことなんだというのが、パンフレットの説明ではなく、実態としてわかっていただけるかと。

田巻：まだ、本書は学内だと学長とか理事とかそこら辺までしか届いてないです。今度大学院も新しくなって、他学部の教員ともジョイントすることになりますから、なおさらそういう意味では、学部の教員もそうですけど学内の教員にも広くよく読んでもらいたいですね。それでは最後に一言ずつ・・

出羽：大変だったことは全くありませんでした。

田巻：編集に関してですか？

出羽：はい、編集に関してです。

立花：編集会議はいつもさくっと終わってましたよね。ポンポンとアイデアが出て、いいね、いいですねと盛り上がって、「じゃ、いついつまでにこれとこれをやって」「それ、私やります」「こっちは僕やります」みたいな感じで。テンポよく仕事できて楽しかったです。

田巻：そうですね。いろんな意味でスムーズかつ有意義に進められたかなと思います。

立花：ありがとうございます。

田巻：それでは有難うございました。